

即効性のない本 3冊

中垣内 隆久 教授

(地方財政論)

うらおもて人生録 色川武大

新潮社 2014年

かつて将棋に夢中になっていたこともあり、ぼつぼつと勝負のノウハウ本を買い集めている。将棋は手の内が明らかなので技術の優劣が勝負を分ける。不完全情報ゲームの麻雀はそうではないはず。運が勝負を左右する。なのに麻雀にも絶対的強者がいる。それが不思議だった。

その一人が「雀聖」と言われる阿佐田哲也。映画化もされた名著「麻雀放浪記」の著者であるが、この人の本名を色川武大という。

中学中退で博打の世界に身を投じ、二十歳過ぎに足を洗って出版社勤めというカタギの世界に。2つの世界で人間模様をじっと観察してきた人である。麻雀かチンチロリンか、昨日まで大勝ちして高笑いしていた人が今日は身ぐるみ剥がれ去っていく。そんな毎日を何とかしのぎ切った人である。

彼は言う。15勝0敗の人間を0勝15敗にするのはたやすい、勝ち続けるのは9勝6敗、8勝7敗を目標にしている奴だと。何かを得ると何かを失う。無理勝ちフォームの崩れを招く。

そしてカタギの経験をあわせてこうも言う。

ヤクザの世界でもこうだ。ましてや、持ちつ持たれつの一般社会では相手に白星を贈るくらいでちょうどいい。全勝を狙うなどあり得ない。9勝6敗を続けるためには、ズルくてはだめ。その上に勤勉・才気。これがベース。これで小さな勝を狙える。

大勝ちするためには、頭をかきながら相手に白星を贈れる度量。これを言い換えると人間に対する愛情。これがないとスケール勝ちができない。そうなると、勝つための技術論ではなく、自分の人格や情緒をどう育てるか、という問題にどうしても行き着いてしまう。

「男はつらいよ」の車寅次郎のように、たまの正月、ワルいおじさんが遊びに来、一杯やりながらポツリポツリと独り言のように、コタツの向こうの自分に聞かせてくれる。そんな雰

困気である。世の中の光と闇の両方に通じた「劣等生」にしか書けない、味わい深い人生訓である。

「我れ百倍働けど悔いなし 昭和を駆け抜けた伝説の商社マン海部八郎」 仲俊二郎

栄光出版社 2011年

ある政府系金融機関にいたことがある。仕事相手は証券会社や機関投資家という、多くの公務員にとって縁のない業種の人々である。資本主義のスーパースターである彼らから学んだことは本当に大きかった。ひと言でいうと、いかに人様のお心を頂戴するかという点である。立ち居振る舞い、言葉遣い、人間関係の作り方とメンテナンス。彼らは小手先のテクニクとしてそれらを実行するのではなく、心底から真心を尽くしているように見えた。

人間関係の機微に精通していることにかけては、商社マンも相当なものだろう。伝説の商社マンに日商岩井（現：双日）の海部八郎という男がいた。ダグラス・グラマン事件という政界を巻き込んだ航空機取引の汚職事件によって知られるが、「商売の極意は誠意しかない。」これが彼の信条だった。

日本の航空機市場が未熟だった昭和30年代ころ、ロッキード製の航空機を扱う代理店を日商岩井が引き受けていたが、三菱商事にその座を奪われかけた。巻き返しを命じられたのが海部である。

最後のサインがなされるまでには、まだ少し日数がある。そこに目を付けた海部はロッキード本社に日参する。責任者が会ってくれない中で日参を続ける海部に部下は「会ってくれないのに意味があるんですかね」とこぼす。海部は答える。責任者が会ってくれなくても、秘書からは『ミスター海部が来ました』と報告を受けるだろう。ということは、責任者の心に海部八郎の存在が1グラムだけ載ったことになる。明日は2グラム、明後日はもっと。それを続けることで、責任者の気持ちにも微妙な変化が生まれるだろう。商社マンの執念とともに、営業活動のキモを教えられたような気がした。

できる人・組織の共通点は人間関係の構築に関する強烈な関心であるように思う。私淑する元上司が「人間関係がうまくいっていれば仕事の半分は成功したも同然」といつも言っていた。それを思い出させる本である。

「100歳の美しい脳 アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち」

デヴィッド・スノウドン著、藤井留美訳

DHC 2004年

函館のトラピスチヌ修道院を観光すると決めたとき、修道女がなぜ高齢になっても元気ではつらつとしているか、この際少し勉強してみようと考えた。修道女だけではなく、仏教の僧侶もかくしゃくとした人が多いイメージがある。宗教者は健康寿命が長いのか、それはどうしてなのか。

掲題の図書の原題は「Aging with Grace」（「老いる、恩寵とともに」）という。賛美歌「Amazing Grace」をもじったものと思われる。著者のスノウドンはアルツハイマー病研究の第一人者の疫学者だそう。

アルツハイマー病にかかりにくい脳とはどういうものか。

修道女は、生活様式も同じ、所得水準も同じ、医療程度も住宅事情も同じなので、サンプルの間の比較がしやすい。スノウドンは彼女たちのキャリアパス、残された自伝（シスターは入所時、自伝を書くことになっている）、そして死後に献体された「脳」を分析し、謎の解明に挑む。

私なりにエッセンスを抜き出すとこういうことになった。

- ・すべてのシスターが健康なまま生涯を終えるわけではない。アルツハイマー病に侵されたシスターもいる。
- ・教育程度と健康には強い相関関係がある。学習期間が長いシスターほど、どの年齢に比べても死亡率が低い。教育には生命を守ってくれる効果がある。
- ・言葉が達者な人、語彙が豊富な人は認知能力が高度に発達し、神経細胞の接続が充実しているため、抵抗力の強い脳ができるのではないかと考えられる。
- ・「精神は身体とは別の暦で老いていくものらしい。100歳の高齢者に会うことが増えるにつれて、私はその確信を深めていった。」

肉体的にも精神的にも健康で幸福であり続けるためには、生涯学習を続けて知的に向上することがカギらしい。

本は他者との対話であり心の栄養である。

神保町に近いことは日大経済学部の大きなアドバンテージである。図書館や書店街を存分に利用していただき、みずみずしい、丈夫な脳を培っていただくことを願っている。